

井上靖

白
黒
いい
牙
潮

黯い潮
白い牙

井上靖

新潮社版

黯い潮・白い牙

〈井上靖小説全集 2〉



昭和48年 9月20日発行

昭和53年10月30日 3刷

定価 1100 円

© Yasushi Inoue, 1973,

Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話・業務部(〇三)二六六一
五一―、編集部(〇三)二六
六一五四― 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替いたします。

目次

黯い潮

五

白い牙

一〇〇

昨日と明日の間

二〇八

自作解題

四三六

装
画
加
山
又
造

井上靖小説全集 第2卷

黯い潮

第一章

二日の休暇をとって、その二日を沼津の佐竹雨山の家で、久しぶりで家庭的な雰囲気の中に過して来た速水が、小さなボストンバッグを持って、有楽町のK新聞社の三階の編輯局に姿を現わしたのは、もうかれこれ十一時に近かった。有楽町の省線のホームに降り立った時、長い記者生活の習性で、速水はホームの前に立ちはだかっている新聞社の建物に眼を遣ったのだが、三階の窓というどの窓からも、まだ宵の口のような明るい電気の光が洩れていた。その時、直観的に何かあったのではないかという気持はしたのだが、編輯局の入口で、社会部の陣取っている奥の方の一角に、二、三十人の社員が雑然と散らばって、その中に部長の山名やデスクの連中の姿が混じっているのを見るまでは、実

際のところ大したことは考えていなかった。

編輯局へ入って、なんとなく事件時特有のもののしい空気に触れ、こいつあ、相当大きな事件だと思った瞬間、真つ先きに彼の頭を占めたのは、国鉄整理にからんで、組合側がストライキを発令し、政府がそれに対してついに非常事態宣言を出したなということであった。それ以外に、これだけの陣容が居残る場合はちよつと考えられなかった。「何があったの？」

速水は鞆を長く一列に並べてある社会部の机の一番隅つこに置くと、そこに居た若い警察廻りの記者に声をかけた。「下山総裁が行方不明になったんです。号外見ませんでした？」

「見ない。いま沼津から帰ったばかりだ」

事件は彼が想像したものとは違っていた。何か陰惨なものを含んだ暗い感じが、彼の心に押しかぶさって来た。若い記者は、机の上に散らばっている新聞をあちこちめくって、どこからか一枚の号外を探し出してくれた。

「自社だけです。号外を出したのは」

S社もO社もU社も号外はちよつと躊躇った形だったが、自社は部長の山名一人の判断であっさり決まってしまったという。

速水はその号外に眼を通し、それからそこに散らばって

いる朝刊の仮刷の記事を、とびとびに拾い読みしていると、部長の山名が少し酒の入っている赤い眼をして、「いつ帰って来た？」と彼に近づいて来た。

「たったいま。二日あけると、これだからね。凄まじい世の中だ」

山名は、そう言う速水の横から、速水の持っている新聞をいっしょに何となく覗き込んでいたが、

「どう？ これ、やってみないかい」

持前の抑揚のない静かな口調で、山名は紙面から反らした視線を、編輯局の隅の方に投げたまま言った。

「あいにく、警視庁の主任記者が北海道へ行って空いているんでね。しかし、警視庁の方は寛と東野村がいるから、どうにか行くだろう。やって貰いたいのは警視庁じゃあないんだ。デスクの方が三人とも手いっぱい、これが大きく発展すると、そこからは人が割けない」

山名は、人を説得する時いつもそうであるように、粘っこい廻りくどさで、ぼそぼそした口調で言った。

山名の言うことは、なるほどその通りだった。大きい事件では、帝銀事件、平事件が未解決のままで残っており、それにソ連からの引揚者の各地における乗車拒否、国鉄整理の強行、それに対する全国各地の組合の、表面静かだが、底に嵐を孕んだ不気味なざわめき、どれ一つとして眼をは

なせるものはなかった。それでなくてさえ副部長三人が、この上新しい事件を受持つということは、実際問題として不可能なことだった。

しかし山名が速水にこの事件を主任記者として統轄しろというその言葉の底には、また別の意味も含まれていた。それが速水にも、多少心に沁みる痛さで感じられるのであった。速水卓夫が四十を越した年配で、未だに社会部の遊軍記者として、派手といえは派手、のんきといえはのんきだが、その年齢からすれば、それにそろそろ侘びしさの影の付きまとして来る役名のないポストに納まっていることは、日頃からそれとなく心を使っている山名の、いかにも山名らしい人情的な気の配り方だった。いつまでも、ぼやぼやしているな、こころでひと花咲かせろよ。山名はこう言いたいのである。

速水の同期生の中では、速水が一番遅れている。すでに彼の仲間から何人かの部長も出ている。未だにひらの記者として、しかも早急にはどうにもなりそうもないぱっとしない澁んだ雰囲気は速水は、いつともなく身の廻りに形成していた。新聞記者として生涯をやり通すのか、やり通さないのか、ちよっと判断に苦しむような、熱情を喪った妙にそうけた印象が、彼のどこかにはあった。チェックの背広などを、無造作な恰好で着こなして、よく見るとおしや

れだが、遠目にはその崩れたところだけが浮いて見えた。酒を飲むと、ひどく横顔が淋しくなる。酒を飲まないでも、一人きりでホームの外れで電車を待っている時などの背後姿は、風にでも吹かれていような妙にたよりない印象を人に与えた。こうした彼の風貌姿態が、新聞社のような、太い線と荒いタッチの人間が強引に人を排してのさばって行く社会では、一割も二割も損だった。

仕事は緻密で、そつはなかったが、軀で押して行くような熱情的な力はなかった。どこからか絶えず、隙間風に吹かれていような、いつも醒めたところがあった。そんなところが、社会部記者として致命的といえれば致命的だった。

二十代に一度結婚したが、二、三年でそれに破れると、あとは今日まで独身で通している。彼の何ものかが欠けた印象は、そんなところから来るものとも、逆にそうしたものが、彼に人並みの家庭を持たせないとも見られた。

彼は部でも、多くの場合孤立していた。人づき合いは決して悪くはないのだが、若い連中に取巻かれて、有楽町界隈を飲み歩くといったこともなく、社会部記者たちが幾つも造っている若々しいがさつな渦からは、いつも、遠くに離れていた。それに無口でもあった。そうした点、社の幹部からは彼が人を轄べる能力はないと見られているようであった。

しかし、若い記者たちの眼には、そうした彼に何となく惹かれるところもあるらしく、毎年春秋二回の新聞休刊日に開かれる部の懇親会の席上などでは、彼の周囲には若い記者たちが一番多く集まった。こんな機会でないで、このどこか一風変わった不遇な先輩記者とはゆっくり語れないという気持もあったが、またそれとは別に、彼が内にしまっているどこことなくネガティブな得体の知れない冷たいものに触れてみたいという無意識の欲求も働いていることは争えなかった。

二、三年前のことだが、彼はその宴会で、あとにも先にも一度だけ、自己の人生観のようなものを口走ったことがある。

「俺は小さい時、母親が女中か誰か知らないが、ある人に背後から抱きかかえられて、庭の隅の古井戸を覗いたことがある。ひどく深い井戸で、一面に羊歯が茂っている間から、底の方に小さく、水面が見えた。俺はそこに、小さな錆びた鏡でも置かれてあるような気がした。今ならなんのことはないが、なにしろ俺は七つぐらいだったろう。ぞつとしたね。怖いんじゃない。子供ながらにやりきれない気持なんだ。なんというか、こんな地面の深いところに鏡がある！ その時、俺の心の中に、俺の人生にとって最も大きい関係をもつ何ものかが飛び込んで来たんだ」

飲めば飲むほど蒼白む性質で、いつも彼の場合、いっとうに酔っているのか、酔っていないのか見当がつかないのであるが、どうした調子なのか、そんな憑かれたようなことを口走って、その時彼は不意に立上がつた。そしてそのままふらふらと、横に彼を取り巻くようにして坐っていた若い記者たちの間に、横倒しに倒れ込んできた。みんなはその時初めて、彼がひどく酔っぱらっていることを知った。「もし、そんなことがなかったら、俺は二十五の時友達の眉間を割っている。三十の時左翼運動に走っている」

それから、彼を抱き起こそうとする大勢の手を振り払いながら、

「三十五の時俺は女に惚れてる。四十にして市井に名をなしている」

嘔吐したのは違ひなかったが、嘔うような不思議な調子があった。戦前の学生が満州の歌を嘔うような、感傷と慷慨のこもったもので、若い記者たちには一座の乱雑な話声や唄声にまじってそれが途切れ途切れに聞えた。無口な彼が、日ごろ心で思っていたことが、酔いの力を藉りて、一つ一つ、その吐け口をみつめて噴き出して来たような、その時の感じだった。

その時の彼の言い方をもってすれば、幸か不幸かそうでなかったから、一切が彼はその反対だったということにな

る。実際、彼は常に、ある意味で、怠惰とも言えなし、無気力とも言えた。少なくとも、人生に対する受身の、その傍觀的な姿勢は、もはや彼の身についたもので、終生彼から取り去ることは出来ないもののように見えた。

しかし、そんな、新聞記者としてのして行くようなタイプではなかったが、担当した仕事は投げなかった。仕事を追いかけてゆく執拗さは、派手ではなかったが、やはり今の駆出しの記者のまねて出来ないものがあつた。満州事変当時、記者生活を振出した古参記者だけの持つ、修練から得た粘りが、自ら努めなくても身に着いていた。

「どう、やってみないか」

と山名から言われた時、速水は返事は口に出さず、煙草を口に銜えたまま、二、三度、無造作に頷いた。速水にすれば、山名の気持は暖かく感じられたが、しかし、それを押し戴くほどの大した感慨があるう筈のものでもなかった。その夜、宿直の記者たちの他では、速水と副部長の石井が泊ることにして、山名も他のデスクも、大勢の記者たちも、みんな終電車で家へ帰って行った。

速水は五階の宿直室に入ると、窓際のベッドを占領して横になったが、なかなか眠れなかった。下山総裁の行方不明事件も事件だが、それに関する何事も起ころうとは考えられなかった。この事件の発生を耳にした時、ふと心に感

じたあの陰惨な暗い陰はいつか消えて、なにかひどくたわいのない事件のような気がして来た。明日の朝になれば下山総裁は彼も一度行ったことのある池上の自邸へちゃんと帰宅していきそうな気がして、社の連中も、少々神経質になり過ぎていたのではないかと思われた。

佐竹景子の唇を固く結んで、顔を横にそむけた固い印象に、速水はいまも拘泥していた。宿直の記者たちの寝息があちこちから聞えて来る宿直室の狭い闇を見詰めたまま、速水は、景子と沼津の千木浜で別れてからまだ五時間とは経っていないことを改めて頭の中で計算した。そして今や自分の人生において、全く新しい一つの色彩を持った時間が流れ出していることを感ずるのであった。思いがけず自分の心に生れた景子への愛情を、誠実に、真摯に育てて行こうと思う。はなやいだ気持はなかった。強いて言えば、くろい潮の流動する中に、時折隠顕する青い藻の動きを見詰めているような、暗い、しかし静かな、それはどこか祈りに似た感情だった。

速水が殆ど二十年ぶりで、新聞社に訪ねて来た佐竹雨山に会ったのは昨年の五月であった。正午を過ぎて間もない頃、面会があるというので、速水が表玄関の受付まで降りて行くと、初めはちょっと見違えたほど老けた雨山が、先

方はすぐ彼を見付けて、階段を降りて来た彼の方へ、老人とは思われぬ若々しさで、よおと、声をかけながら近付いて来た。芸術家というものの磊落さを、速水は中学時代に、その図画の教師をしていた雨山によって初めて知らされたのであったが、茶色のレインハットを頭に載せ無造作に背広を着ている恰好といい、挨拶ぬきのぎっくばらんな話し方といい、二十年後の今日も変わらず、雨山は不遇で清潔な老画学生といった感じだった。

「早速だが、今日は君に厄介な話を持ち込んで来たのだよ」と、その時雨山は言った。

まあ、お茶でも飲みながら、ゆっくり伺いましょうと、速水は老画師を社の近くの喫茶店に連れ出し、そこで彼の要件を聞くことにした。美味い珈琲屋を選んだのだが、雨山は珈琲にはほんの一寸口を付けただけだった。

「ばかなことだが、僕は一生をかけて色彩の研究をやっている。今年満で六十だから、丁度四十年やって来たことになる」

銀色に光る白髪を、雨山は、若い者がするように、時々手で背後に撫でつけながら語った。

それを最初思い立ったのは美術学校を卒業した年だという。それから今日まで、佐竹雨山は中学の図画の教師をしている時もそしてそれをやめて土地の二、三の学校の嘱託

になつてゐる現在も、その傍ら一貫して色彩の研究に没頭して來ていたのであった。

「色彩の研究と言っても、詳しくいえば、僕のは、日本色彩文化史の研究というのだがね」

と雨山は言つた。

速水には全くの初耳だつた。静岡県東部の、夏期だけ東京の植民地のようになる小さな避暑都市の中学校の校庭で、生徒に写生をやらせながら、自分は両手をズボンのポケットにつつ込んで鉄棒の向うのクローバのいっぱい生えている草原をぶらぶら歩き廻つたり、或いはそこに腰を降ろして、終業の鐘の鳴るまでは立上がらないでいたりする他の教師とは一風變つたずぼらな雨山の書生っぽのような姿が、速水の知つてゐる二十年前の佐竹雨山のすべてであつた。迂濶なことです、知りませんでしたね、と速水が言ふと、

「知らんだらうよ、君の時代の人は。あの頃はまだ僕の仕事は海のものとも山のものとも解らん頃だつたからね。しかし、あの頃でも、君たちには悪いが、図画を教えるのはいい加減にして、僕の頭の中は、色のことはかりだつたさ」

そんなことを話しながら、時々速水の方に向ける雨山の眼は実に美しかった。心の穏やかな美しい人柄が、いつも笑つてゐるような二つの小さい眼から感じられた。老年ま

でこんな邪氣のない美しい眼を持ち運んで來た人に、速水は初めて出会う思ひで、老旧師の人柄を改めて見直す氣持だつた。

「お願いというのは他でもないが、その僕の『日本色彩文化史の研究』』というのが十二部から成つてゐるが、それを三冊ぐらゐに分けて出版してくれるところはないかと思つてね。君が新聞社にゐるので、一応、まあ、口だけ掛けておいてみよう」と、今日話を持ち込んで來たまでのことさ」

速水の負担にならぬようにとの思いやりからか、雨山はそんな言い方をした。その時彼は全巻の目録と原稿の一部を持参してゐたが、全くそうした方面に門外漢の速水には、老旧師の生涯をかけての研究というものが、いかなる価値を持つものか判断の下しようもなかつた。

その日は、原稿の一部を預かつて、速水は雨山と別れた。終戦直後の異常な出版好況期が終つて、出版界は漸く整理期に入つてゐた。戦後の新興出版社も、大資本を抱えてゐる老舗も、徐々に迫り來る大不況時代を乗り切らうと、文字通りの死闘を展開しようとしてゐる時であつた。速水は心安い二、三の出版社に、佐竹雨山のライフワークたる『日本色彩文化史の研究』の話を持ち込んでみたが、勿論相手にされよう筈はなかつた。また速水としてもそれが相手にされようと思つての持ち込みでもなかつた。もし、か

かるものに眼をつける奇特な出版社があったら、その時は出版社の方から改めて雨山にあって貰い、その上で雨山の研究が出版するに足る価値を有するか否かを、改めて判断して貰おうという甚だ自信のない気持でもあった。

速水が雨山から預かっている原稿の一部を鞆に詰めて、沼津の香貫山^{かぬきさん}の麓の彼の家を訪問したのは、十月も末になった頃であった。半年近く預かりっぱなしにしている原稿のことが時々思い出されて前から気になっていたのだが、丁度その前の晩、高等学校時代の親しい仲間が五、六人熱海で集まることになり、彼もそれに出席する筈であったので、どうせ熱海まで行くなら、いっその機会に、その翌日ちょっと足を伸ばして、沼津の佐竹雨山の家まで原稿を持参しようと思いついたのである。

沼津の街を外れて、静浦へ行く丁度中間ぐらいの地点に、佐竹雨山の家は背後になだらかな香貫山の小丘陵を背負って、旧街道からちよつと這入ったところにひどくひっそりとした佇まいで建っていた。人通りの少ない街路から二、三段の小さい石段を登ると、そこは両方生垣で挟まれた細い路地になっていて、それが奥まった玄関に通じていた。その路地を歩いて行く時、縁側で籐椅子に腰かけている着物を着た雨山の姿が、生垣の間から覗かれた。

三間か四間のこぢんまりした平家であったが、いかにも

雨山らしい清潔な感じの構えで、掃除の行き届いた小さい玄関^{えんかん}のたき土に立って、物音一つ聞えない静かな冷んやりした家内の空気に触れた時、速水はもう何年か自分が忘れていた人間が生きている場所としての住居^{すまひ}というものを思い出した。遠い昔ではあるが、かつて確かに、自分はこうした場所に置かれ、こうした場所で生きていたと思った。

彼は大学を卒業してから十何年、眠る場所としての部屋をしか持ったことはなかった。死んだ妻のはるみと三年程大阪の郊外で家を持った経験はあったが、その時代は小さい夕刊新聞社に勤めていて、朝から晩まで忙しく駆け廻り、ほんとに眠る時だけ家へ帰るといふ状態だった。その後K新聞社に転じたが、その頃からあとは今日までずっと独身生活が続き、アパートや下宿を何十となく転々として暮して来た。転々したといっても彼の場合ただベッドの置き場所が変わっただけの話だった。眠るためにのみ彼は毎晩自分の部屋に帰って来た。そうした彼の場合は異例だとしても、社の同僚のたれもが、佐竹雨山の営んでいるような家を決して持っていないことを、その後、雨山の家を繁く訪れるようになってから、速水は時々感ずるのであった。それは新聞記者の自ら気付いていない哀れさのようにも思え、さらに広く、都会の勤人のすべてが遅かれ早かれそうになってゆく現代社会の持つ一つの宿命のようにも思えた。

ともかく佐竹雨山は、家庭を持ってから今日まで四十年、妻の増代と一人娘の景子と三人で、この一つの場所であつて、眠つて仕事をして来たのであつた。ここで悦び、ここで悲しみ、ここで怒り、ここで人間として生活して来たのであつた。短い家庭生活の破綻からそれに続く今日までの荒涼とした磧^{かぢ}を歩き続けて来た速水には、初めて遠く忘れていた故郷を思い出したような驚きが、佐竹雨山の家庭にはあつた。

雨山は小さい中庭の見える八畳の書齋で、自分の研究の内容を速水に説明するために、時々立上がつて行つては、書物を持って来たり、戸棚を開けて資料を整理してある幾つかのボール箱を持ち出して来たりした。速水がこれまで見て来た学者たちの書齋や研究室とは全く異つていた。大型の本箱が一つと小さい机が一つ清潔に置かれてあるだけで後は何もなかった。必要な書物以外は、一冊の余分の書物も雨山は貯えていないようであつた。

しかし、整理カードやノートは門外漢の速水がみても見事であつた。『古事記』、『日本書紀』から『六国史』、『扶桑略記』、『百鍊抄』、『本朝世紀』、『榮華物語』等の歴史の大筋から、『万葉集』、『懷風藻』、『古今集』を初めとする各種の勅撰和歌集、それから『竹取物語』を筆頭に平安朝以降の物語文学、さらにまた『大宝令』、『延喜式』、『類聚

三代格』、『法曹至要抄』、『政事要略』等の諸全集、さては公卿^{きやうけい}の日記類に至るまで、あらゆる史籍古文書類から、凡そ色^{いろ}に関する個処は尽く抜萃され、それがそれぞれの目的のために整理分類されてあるのであつた。

雨山に言わせると、色彩は人間生活の鏡といつていいほど人間生活と密接な関連を持ち、立派に文化の一要素として、文化の一面を荷担している。ここに色彩文化史としての研究が成立する。自分の研究の中で、多少とも誇り得るものがありとすれば、それは古代の色彩の復元研究である。古代日本人の生活と密接な関係のあつた色彩の真相を捕捉しようとしたことである。色彩に対して古代人が持った精神内容を知るためにも、さらに広く古代人の心理生活、古代の社会心理を知るためにも、古代の色彩の真相を掴むことは絶対に必要なことである。言うまでもなく、古代の色相は、古代の染色法によつて把握するほかはない。これに何十年かの歲月がかかつてしまつたという。

「蘇^す芳^{ほう}染^{ぞめ}という色があるね。これ一つだつて復元するとなるとなかなか困難だ。勿論、蘇芳で染めたのだが、この蘇芳を採し出すのが容易ではない。今、日本では、春、葉の発芽前に豆のような花を咲かせる灌木を蘇芳と呼んでいる。通常たれでもこれの花か木皮で染めるのが蘇芳染と思ひやすいが、それは違ふんだよ、君。古代染料の蘇芳は、その

頃、ビルマ地方から輸入した喬木の材を細かい屑にしたものさ、また丁子染（ちんしじぞめ）にしても、いま日本にある例の、春、芳香を放つ丁子とは違う。これは当時南洋から輸入した喬木の花の苔（つばき）を使ったんだ。紫草とか、^{（つばき）}橡とかいろいろあるが、いずれも名称は同じでも古代と現代ではその実体がまるで違う」

雨山は、四十年の研究歲月の何分の一かを染料と媒染剤（ばいせんざい）の決定に費し、漸くこの問題を片付けると、今度は染色の手法と操作の困難な問題に逢着した。唯一の手懸りは『延喜式』だが、それには染料、媒染剤、顯色剤の用量の記入はあるが、操作の順序、手法については全く触れていない。一種の染料で一つ色相を染める場合はまだいいとして、二種の染料を用いる場合は、二種の染料を混合して染めるか、重ねて染めるかが判らない。結局一つ一つの染料の性質を知って、そこに合理的な方法を見出す以外仕方がない。そこで雨山は半生の大部分をかけて、各々の染料に当時用いた媒染剤のそれぞれを作用させてみて、それがいかなる現象を呈するかをみる、労多くして功少ない実験と取組んできたのだという。

「一つの植物体から色素を抽出するまでも長い歳月がかかる。ただ煮ただけでは出ない。紅は紅花（べにばな）という草の花弁から採るんだが、その工程操作が厄介だ。山形県の出羽村

から種子を持って来て庭で栽培して、それを加工して最後の製品を造るまでには六年かかった。藍（あい）も六年ぐらいかかっている。紫草は岩手県から種子を探し出して三年くり返して失敗し、次は根を宮城県から移植したがこれも失敗、発芽したが途中で枯れてね」

雨山は世間話でもするような調子で、そんなことを語った。そうした話は聞いていて、速水にも面白かった。雨山が話をしている間に老夫人がお茶を運んで来た。

「大変なお道楽でして、お蔭で私も一生染物屋さんを手伝わせられましたね」

雨山と同年配の、質素な身なりの夫人の笑顔も雨山に劣らず美しいものだった。

「藍が立つようになれば紺屋も一人前だと言われるそうですが、どうやら私も一人前になりました」

そんなことを夫人は言った。染料の抽出に最も適当な度合いの検出が難しくて、藍の場合はテストを何百回も繰返したと、傍らから雨山が夫人の言葉を説明した。そして夫人は速水の方を向いて、雨山は庭の方を向いて、二人はめいめいの姿勢で、同じような静かな声を立てて笑った。

話が一段落すると、

「じゃあ、ひとつ製品をお目にかけようか」

と、雨山は立上がつて部屋を出て行ったが、暫くすると、

種々の色彩に染め上げた布の巻物を両手いっぱい抱えて戻って来た。そしてその雨山の背後から、これまた同じようなものを持って現われたのが景子だった。

「僕の娘だよ」と雨山は言った。

景子はその時黙って挨拶したが、顔を上げしなに見せた笑顔が母に似て清純な感じだった。

雨山の口から、紫とか茜とか紅花とか、あるいは芫安、黄蘗、藍、大青、そうした言葉が飛び出す度に、景子はそれに相当する色彩の布を抜き出して、その布の束を速水に手渡したり、着物の柄の品定めでもするように、ちよっと自分の肩の辺に懸してそれを速水に見せたりした。

「どう、綺麗だろう！」

と、雨山が言った時、景子は白橙の樹皮を鉄で媒染して染め上げたという紫色の布を肩から胸へ掛けるようにして支えていた。『枕草子』に、二位三位の袍をいら、かしで染めたと出て来るが、これなんだよと、雨山は言ったが、なるほどそう思ってみると、品位の高い深い紫色であった。

その紫色のせいか、景子の化粧してない顔の白さが薄暗い部屋の空間に浮き出て、綺麗だろうと言われた時、その言葉が景子を指して言われたのではないかと思ったほど、景子の顔はその瞬間、速水の眼にはむしろ生き生きと上気したような美しさで映った。

その日はほんの一寸と思った訪問が、雨山に引留められて、夕食まで御馳走になり、結局速水は夜の汽車で東京へ帰った。

このことがあってから、速水は時々暇を造って沼津まで出掛け、佐竹雨山の家を訪れるようになった。肝心の『日本色彩文化史の研究』の出版は、その後速水もさらに知り合いの大学教授の紹介状を貰ったりして二、三の大出版社にも当たってみたが、いずれにせよ、そういう特殊な出版は、出版界の混乱が落着くまではてんで話にならないらしく、結局は二、三年先までそのままにしておかねばならぬ四囲の状況のようだった。

実際、佐竹雨山の仕事が生世に出るためには出版社の大きい理解と損得を度外視した犠牲的精神がなければ望み得ないことであった。雨山は自分が半生をかけて染め上げた色の色彩の見本を、一寸四方ぐらいの大きさに切って、それを書物の中へ挿入しようとしていた。そして現在彼が持っている色染めした製品からは五百部の書物に挿入できる見本が取れる筈であった。かなり龐大な頁数になる三巻の、五百部限定出版となると、速水の素人眼から見ても、その上梓には様々な困難な問題が含まれているように思われた。何度目かの訪問の時だった。

「いいさ、五年先でも、十年先でも、いつか出版ができれば